

家族

を問う

個を尊重する デンマークの家族形態

戸籍のない家族

ちょうど13年前、39歳になった私はデンマーク人と再婚し、その年の暮れに男の子を出産しました。夫も再婚でしたが移住、結婚、出産と、それぞれの事務手続きがある中で、移住当初からさまざまな戸惑いと驚きを感じてきました。

まず、結婚。2人とも再婚だったため、デンマークでの結婚の手続きには「離婚証明書」なるものが必要でした。デンマークでは、そういう書類が存在するのですが、日本にはありません。ないものを私的に作るわけにも行かず、それに相当するものとして、戸籍謄本の英訳を自分で付けることで、その書類に代えました。

この時初めて、日本でその存在を当たり前に思っていた「戸籍」というものが、この国には存在しないことを知りました。

婚姻届は、何々家の戸籍に入る、という感覚ではなく、夫と私という個人と個人が登録



ギルライ市の市庁舎での素朴な結婚式。家族や親しい友人が見守る中、市長さんの前で夫婦の誓いを立てる夫と私

上繋がるという形になるだけで、家族を単位とした書類が新しく作られるわけではないことをとても新鮮に感じました。
私が名乗る名字も、3つの選択肢から自由に選ぶことができ、登録する際にどうするか

を決めます。旧姓であるTAKADAをそのまま名乗ってもいいし、ミドルネームにしてもいいし、夫の姓であるKELLERだけにしてもよい、という3つの選択肢です。

私は、ミドルネームにTAKADAを残し、YUKOTAKADAKELLERとして結婚の登録をしました。生まれた息子は、両方の姓を受け継ぐ形で、名前以外は私と同じになりました。これも私の姓だけを受け継いでもいいし、夫の姓だけを受け継いでもよく、親子でも姓の違うケースもあります。

デンマークでは、CPRナンバーという生まれた時に与えられる個人個人の個別番号があるのですが（外国人は居住就労ビザの発行と同時に取得）、その番号で税金や病院、銀行のシステムなど全て管理されており、税務上で言うと、2つのCPRナンバーが、夫婦として繋がるように登録され、それが税務処理上の夫婦＝結婚、ということになります。この登

高田ケラー有子

Written by
YUKO
TAKADA KELLER

造形作家
(デンマーク・北シェーランド在住)



録をしているのは同居しているカップルの約80%で、残りの20%は夫婦であってもこの登録をしていないので、書類上では結婚をしていない、ということになります。

出産の報告は、昔は教会に登録するシステムでしたが、現在は、生まれると同時に赤ちゃんを取り上げた助産婦が（デンマークでは出産は助産婦が仕切ります）、コンピュータで登録をしてCPRナンバーを取得し、両親は決めた名前とCPRナンバーをインターネットで登録することで、出生届が完了します（教会に報告する方法も残っています）。つまり、役所が個人のCPRナンバーで全て管理しているので、私という個人をCPRナンバーで検索すると、夫は誰で子どもは誰、というデータは出て来ますが、私たちが3人が1つになった家族の書類はありません。

尊重される個々の繋がりと 家族の輪

こうした社会的なシステムが背景にあるのですが、夫と結婚した時も夫の両親との関係で言うと、私は義理の娘にはなつたけれど、結婚したのは夫という個人であり、ケラー家の嫁になつた、という感覚は最初から全くありませんでした。それは、義母の方も全く同じで嫁として扱われたことは、この13年間、一度もありません。

お互いに言いたいことはストレートに言い合ひ、義母宅に食事に呼ばれても手伝わなく

てはいけない、という感覚もありません。もちろん手伝わない、ということではなく、そういう義務感を感じない、ということなのです。

デンマークの家族は、両親や兄弟、祖父母も含めた家族が集まることも大好きで、誰かの誕生日には必ず集まったり、集まれなくても互いに電話でお祝いを言い合ったり、とにかく大きな家族の輪をととても大切に思っています。でも、その意識は個々の小さい家族を尊重してこそその大きな輪であり、また、その小さな家族（世帯）の中でも夫は夫、妻は妻、子どもは子ども、という個々の尊重が基本になっています。その中で夫と妻、父と子、母と子、という個々の繋がりととても大切にしています。

デンマークでは離婚率が高く、2007年のデータでは2・6%ですが、両親が別れても、子どもと親との関わりは、できるだけ保てるように双方が努力します。子どもにとつて、それでも両親が別れることは辛いことですが、親が子どもを気遣って離婚しないのではなく、自分たちの人生を楽しく生きるために、夫婦という関係を解消しても父と子、母と子という繋がりを大切にしながら生活しているケースがととても多いのです。

また、親が再婚するケースも多いのですが、「個の繋がりが」という意味で、血の繋がりを越えた関係が生まれることもあり、新しい家族として2人目のお父さんやお母さんと仲良く暮らしているケースもよく目にします。

夫の場合も、義母が2回離婚をしています



義母夫婦のパーティ。自分たちで庭に建てたパーティ用のドームにて（花柄のワンピースを着てワイングラスを持っているのが義母。その左の白いTシャツを来ているのが義母の夫）

が、最初の離婚は夫が7歳の時。5歳の妹と3歳の弟、それに韓国から2人の養子を抱えての離婚でしたが、再婚相手となったステップファーザー（継父）とは、今もとても仲がよく、育ての親として、男の子として多感な時期を一緒に過ごせたことが、夫にとつて大切な存在となっています。

私たちの結婚式には、夫の実父はもちろんですが、この最初の継父と義母の現在のパートナーの3人の父親が、それぞれのパートナーを伴って出席してくれました。日本では考えられない光景かもしれませんが、夫にとつては実父も育ての父も大切な存在です。義母との関係が終

② 家族のつながりの多様なあり方



我が家のリビングでステップファーザー夫妻とくつろぐ私たち家族

婚しており、その伯父の別れた奥さんとも血縁関係は全くありませんが、交流はあります。彼女は、姑にあたる祖母ととても仲がよく、伯父とは別れても祖母とよく旅行をしています。遠方に住んでいるため、祖母亡き後、私たちと会うことも少なくなりましたが、彼女の養女が、時々訪ねてくることもあり、家族としての繋がりがなくなっても、個として繋がっているのです、縁が切れることはありません。

親と子どもの関係で言うと、最後の面倒を子どもに期待している親はまずいない、と言っていいでしょう。親は親、子どもは子どもなので、自分たちの老後を子どもに託そうなどとは思いません。これも社会的な背景として、高齢者への介護や支援が制度として充実しているからこそ、成り立つことであると思いますが、夫

わったとしても、夫との関係が終わったわけではないし、大切な家族としての繋がりが精神的には持つているので、当然の光景で、義母も今のパートナーも彼らの出席を心から喜んでいました。

義母の3回の結婚が、私のデンマークファミリーをより大きな器にしてくれていますが、義母の実兄も離

婦で入居できる、いわば老人たちがケアされているアパートのようところで、プライベートも尊重されながら、人生の終盤を心豊かに暮らしているお年寄りも少なくありません。

切れることのない繋がりを大切に

デンマークの家族のあり方を見てみると、日本のように戸籍謄本など目に見える形の書類上の家族はなくても、個を尊重する中で、一緒に過ごす時間はとても長く、また一緒に過ごす空間をととても大切にしています。毎日家族揃って食事をするのは当たり前なこと、父親も特殊な職業を除いて、夕食時には必ず帰宅しています。大きな家でも、個人の部屋は寝るためだけのもの、何をすることもリビングで家族一緒に過ごすことを基本としています。我が家でもリビングルームがとても広く、寝る時以外は大抵ここで家族が時間と空間を共にしています。学習机という概念がないこともあり、12歳になった息子は宿題もリビングルームで私たちがいるところでやっています。

子どもが大人になり、個として独立する時、夫婦は子どものいない個と個に戻ります。その繰り返しの中で、個を個として尊重しながら、切れることのない繋がりを大切にしているのが、デンマークの家族形態であると思います。

個人主義のデンマーク。人は人、自分は自分、という概念が強く、人と比べることを好みませ

ん。それはともすればわがままな行為になることもありますが、そこには他を尊重する、という意識もあり、だからこそ平等の意識が育まれ、弱者に優しい社会が形成されていると思います。

デンマークに比べると平等の意識そのものが違う、と思うことがよくあります。誰もが同じ物や同じサービスを受けることが平等ではありません。必要な物が必要な人に与えられることが平等です。同じ家族という器の中にも、それぞれの考え方や好みは違います。他人であれば、そこで繋りが切れても、家族関係にあつては、個を尊重しながら関係も繋がります。この家族関係は国の縮図でもあると思います。国という大きな器は個に置き換えれば家族です。家族の構成員である国民の個を大切に。この国が「幸福度世界一」と言われる由縁はそのあたりにあるのかもしれない。

CEL

高田ケラー有子(ただだ・けらー・ゆうこ)

造形作家(デンマーク北・シエランド在住)。京都市立芸術大学大学院修了。日本在住時よりヨーロッパ、アメリカなどで作品を発表。1997年よりデンマーク在住。近年はデンマークを中心にヨーロッパ、日本で作家活動を行う。「ミッシェンワイク」そして、東京都水道局「水の科学館」、岡山県早島町民総合会館「ゆるひの倉」などの作品を手がける。著書は『平らな国デンマーク』『幸福度世界一の社会から』(NHK出版生活人新書)。